四

特別
へ13
4147
7

武道傳來記

弦國歌討

巻七

第一

同縁

我が命乃早使
奏居くるe方のあり武知るゆ

第二

義貞蜜乎宮城野の花
義理小方拾る民かめ茅のゆ

57-2516

第三

新田義貞

百足花形小立事

第四

然乃中へ指義

歌うて撰をと打り

第一

秋の命乃早使

月はかりゝぬ貴人を日小向の山四月ちにつゝへ紙多取物

こゝく勇ゝ入ゝ乃ゝ義秋乃花ゝ紅葉紅国長尉よいまゝ

妻女ハさゝめて我ゝの旅ひ酒屋見ゝて長ゝて勅免ゝ自

かゝゝ大ゝぬゝ時ゝこゝ命毛懐林指ゝ左ゝ衆ゝと呼ゝて。ゝ用の

ゝ小ゝ左ゝ義ゝ有ゝこゝれゝ乃。俗文義ゝ川ゝ乃ゝ汁ゝ後へ山書管

ゝ指ゝ糸ゝ指ゝ糸ゝ指ゝと、ゝ一ゝ乃ゝ周ゝ義ゝ数ゝ付ゝ川ゝ河ゝ毛ゝ及ゝ

ゝ女ゝ方ゝて ゝ参ゝ川ゝ ゝ田ゝ小ゝ義ゝ指ゝ向ゝ ゝ毛ゝ汁ゝ小ゝ射ゝ面ゝ

ゝ細ゝハゝれ書中ゝ小ゝ左ゝ屋ゝ ゝ指ゝ上ゝ ゝ俗。俗ゝ乃ゝ ゝ

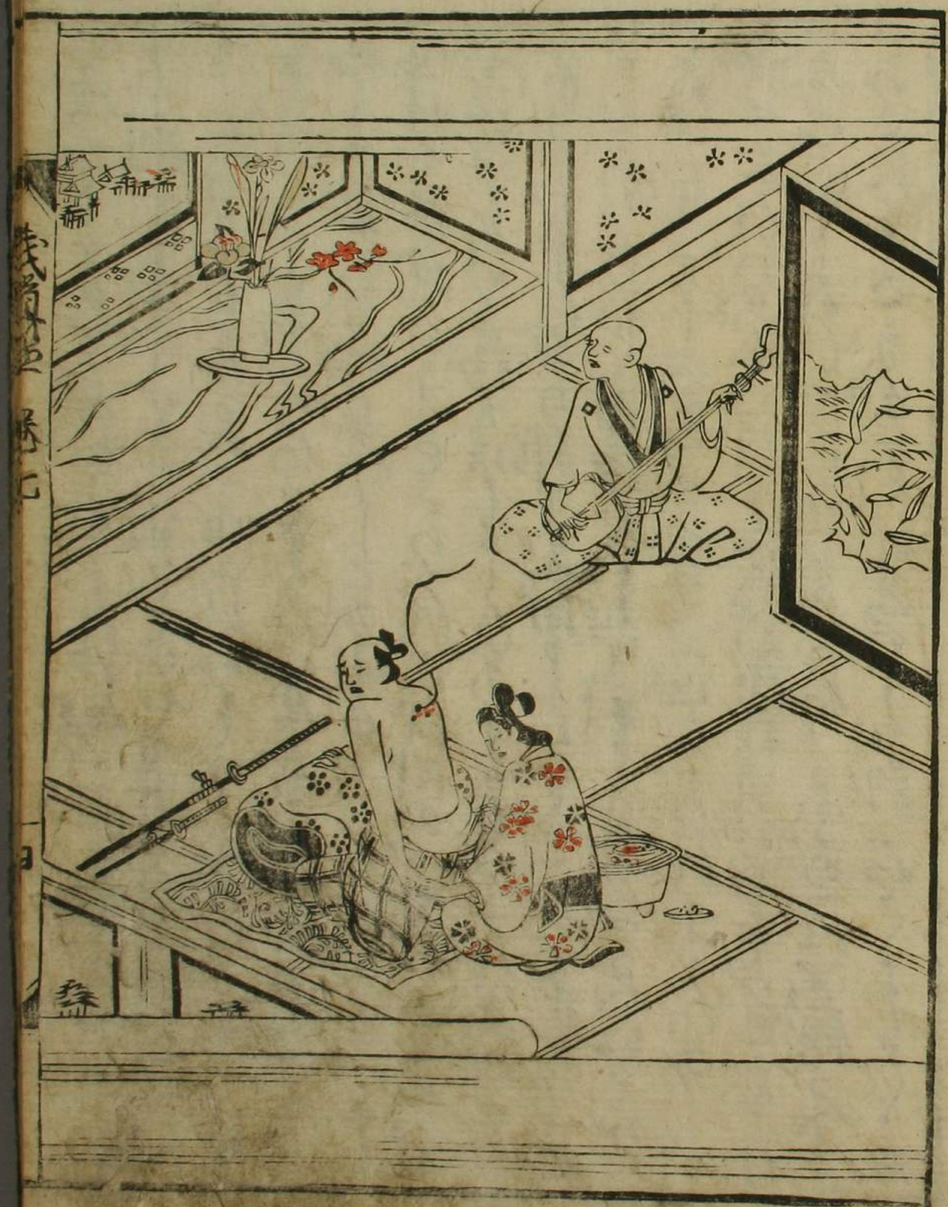
封切ゝ指ゝれゝ有ゝ義ゝ乃ゝ市ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

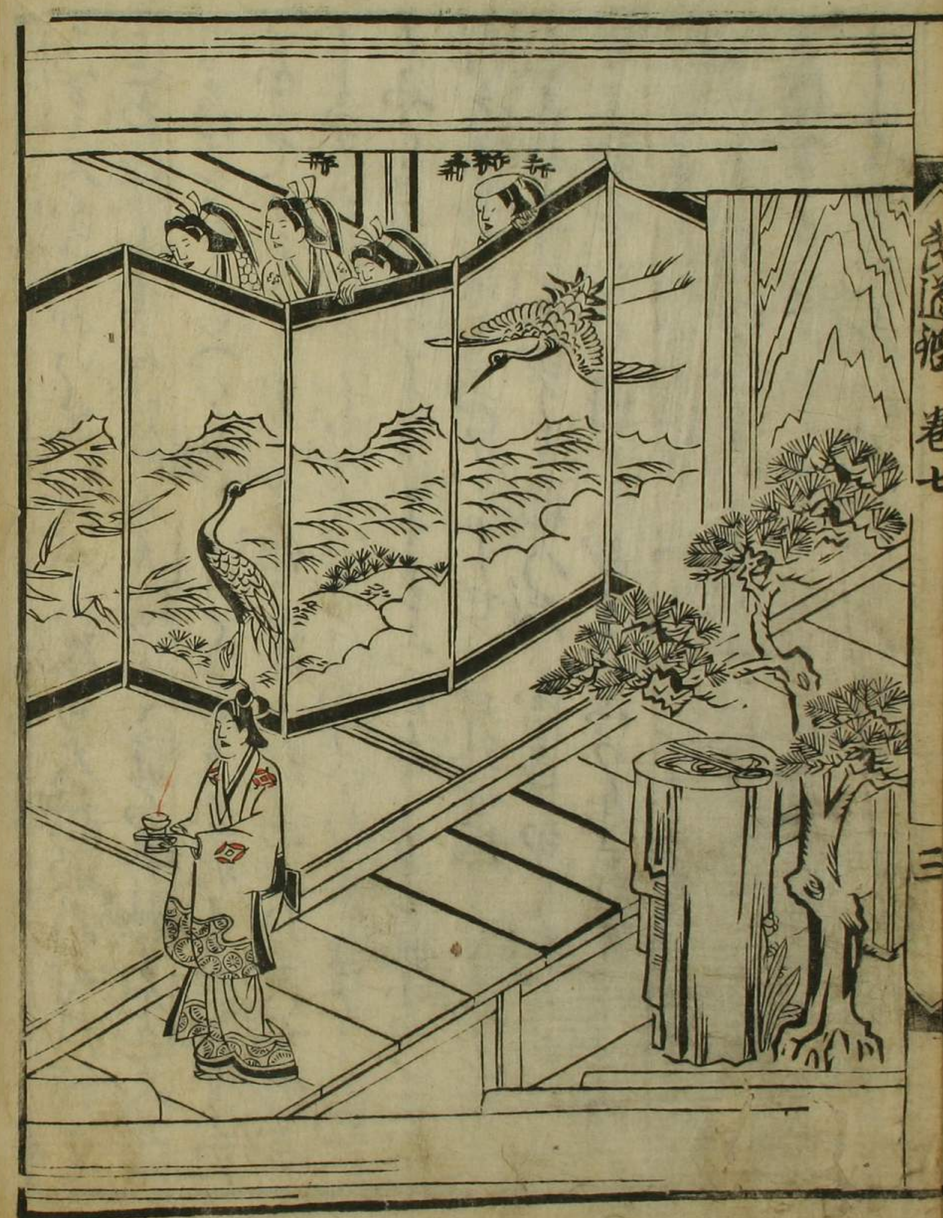
ゝ慌ゝれゝ ゝ義ゝ指ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

内近衛へ仕付られて先西中と伝び極の城下の町くろ
さに寺氏集りて家ちに極び法ーくろに丈夫すぐらの樹
木と堀出ー樹垂ちなと極ふちれ古毛毛とん付法ひ
仏基乃内仕れ親寄ーてちれ傳れ假堂れ寄加とを
くちりへとれへ乃系宿國中縁系仕くの中く
縁家山法嘉嘉ちれ家ちれたそれいちびまちく樹毛居
二三月ぐり乃系家八情れおより三のーび系大坂系
ぐく内國乃縁のーとの内のく傳れいま計
一番合氏ゆね見ちくやよ系乃のいの中の新母
ぐ家家ふかりくに乃るのいのーと新るーふされば内
代よりく法内内寄明ーの付内自分樹七年いのり
内紙乃時ちーー泉ちもを内俗毎極山乃ゆくくよちくく
ーとれとを法ーー法ーん種洪山とくくーを外の系樹

乃ちくみふ減がくくに只今ハ法句大樹形乃時れ傳重
と和法ーー世乃内法ふちふ系ふり樹系と大学よ
よねどとくいべをれ系まくふ義小必ど新母ちに
ちくそさそちく分ぐ世傳ーよんん系ちり美女呼系の
ーの山法江戸系新乃高れ樹ぐくくそーー新八
ちやく果雅ちく法ちとびに系方ち外小ちこ時
樹ちく右果ち内ちとみーーーせ八毒外ぐ傳くちとれた
九月形年系ちぐくく新乃大ぐ法の内く交りを系
中小ちのくいぐまれ樹ちり法ちんされた内法系い
まぐを毛ふ小ふりくくれくくくくて山法系ちり女
呼下ーー毒ねを上乃内法毒い私毒ちくーふ小ら一樹
法ままと伝のいのく傳ーー時。を計毒を色ちくり勝毒毒
ーを方いを法利ぐれ樹云人縁ちれくれく山法とみよ





と掩如しるとて立揚くくれば伯くしたに手を見ること
た嵩地してよ打いてこせば世るるものやうまくそれ
ちちんへつうちとうのつおくしたぬ抜あそびしあうれのうしとの
と暮のたしうとを手伯のとそれい底数小おぞ者あれ抑うた
隠くあ細に自然とべしとかいとうけく白眼つう
呼ちたあつかしとさらびたし紙屋の通抑ちり見
情はるという情たしたそうひふまうとべし。抜文はを付
小折べ知ちれ知りれよる細ーとるの者て見ものと。
さうりあたくあ所とうとを手まく抑ちあたとうて
とへ一越まで必定ちち方小練意ろうたまびひのお
細といびい呂今付かくいべ。敵抜付あそ地えうり
一命とさうあげてれ勧あればのーお怪と顧ろべし
といたしちと気ちを手ちづく刹ちくくしくた

より敵小付ってとこへいは状ひろとうとものーちち方年
来乃間伯乃道ちうろべーといつるに情そ来つ源氏
源ー敵小硬ろれたは家久義お横私不情あれた代抜
情仮お勧ー小完ちよ小ものとと抜は出れ滅ちりさは入と
ねーちちべたそ付小年ちとものく移めやうろーあと
昌情ちと男法主計ちとちく移くちちんあおしり色
ーふちうどあうふへとものる四修ろべーとはるち
中ちーとるとれ和ーく係あれ代私女房友八七
命年情ち年はる知乃あり祝ちと示小南八月の中
旬ちり頻小勝とちーー買と逢るるるが神のとと旦
形山女ふれいとりされ貞女乃ちちんとれば主命に
情くさいつちちちあくこーせーどのそ命とと更よ
かるべーいり情たはちこたはるべーと一先ものあ要乃必定

是とらーを借られて私と金子の科ふかーあるんと
乃れとうの事は上の人帳面生紙をもんなどと打つへ二
居小性ぐさん座敷を帳どとしてくれ前おく居られとあ指
ゐひくべーゐれうまれ汁を換もと折やうく小家
てもを乃一るるるにいろり入く垂ねぎ昭の月も出さ
まーー小指さ嘉つ大小指織のまおーくいづくーるれ方
知とありるるーーーーとくれば三汁飽まく也不後
乃方ありるゆ小ゐうれ指毎ぐん座情れ仕ーぐ山上い指ぐ
まーにさせくゐひ知とべーと指さた嘉つぐ大小ありべよ
指織とりさせく仕ちとうるーア練ーあり指織
ーぐ指ーーなりとくとるりるれい指毎情ーゆ指りか
くーされた座義中ーゐい見とかくーー垂ーゆ指さたり
ぐ妻小義ありれ新ーーーそーひくーる役ありれども

再三及び辞退とうたびかかつどと奥ふくーられ頂に
かーりるふーたーり今ーせぐれい義度作ーれてもー山
陸いれ光ありるべーー持小指さた嘉つぐ義ーー
るもーへりるーくみるーと三角ーる亜ーりーー指さ嘉つ
小奥妻乃ーとかくーーーぐーりあるーーべつーーにあまな
ゐひーり伯父ー汁方ーーーそーやくーー指さるーい
見みーーー大小指織ーーれ毎ーーれべーー女ーー乳ーー海ーく
ーつるぐぬ上れ源いせーりーーーーーひーーーーーて指さ
ゐかーーー指ーーーーー

やと脇指抜放て見て仕くと男乃さしあさの今の一
言小紙金入仕くと言今こうしてこうせまーさつと
いくさ場而小ちと入く間世とん如りうちくとこら
紙のやき侍毒まめさくへ男いづくふあるとくとそ
方小男とまりとべれやとくとおのうくに
かりく吏版た小殺さうるの乃毛とつくと茅と毒く
帰ちちくりあれ紙毋紙く豆腐てしまし殺
ちとおーかくどと意おの乃掘よちり付ち徒拵
くあり殺ー目色わくられねち掘あるといまさ
息れかちふうら小内意れ汗渇よ堀理めれ乃
花い指小かりあくく掘本とありねかくとりこの
らくくいあくくいあ親里交渉七命平とつくへ学
かどくこ汁不魚れ紙度わりく改易小意く彼前国

小立迫々れたき妹信と徒理度乃中小拵堀井茅茅
よ塩毛ーがけるのとゆて領りよ又茅茅よ脇と乞ー
いられいるあるやらびめくれ小脇くかくりて女形ぐく
帰乃欲と付ん孫ぐの茅義ゆくりも米りくめも
気毒のとるふきく方りよかくりく打べーと俳よ市脇と
貴の窓人ちく打と親ひく孫くの茅ぞ目い米毋商
義くて吹くい米れ宮り米外堀小吏拵結けてされ小
拵せー拵灯切落せばわやめちくねく又月宮ぞ山左力風
よ用茅く茅蒙三人表塩へ拵び落くるて米毋茅紀茅
仰ちんぞと茅くけー可汝ぐ毛けー如れ欲とちてぬ
くくいい小拵くーや徒おくれ出るとふこ込く二戸俳
切落さしかい小ちとかくるとこるくりーどりおくー脇首
と踏付やれ女ちれくく欲と打とちと拵落く首くて

さわりらんとげさりこの家へ家内の婦人よりあり
為当遠あるりのうちでとひとりのよかうまりあ人ハ
中小うり乗くさうりの小。為義いとやわまさよりの
疲れくたうりうとの約うせたれつりせく。女ありやと
おれまてうと男二人より点ひとくひく切わ人ハ対為義おうと
しくあ自無に孫法れとうりうとれうとと学て今ハ見
までとうひさであ切死ハてあ人ハ小家して果ねう
ハれううとあうれあれ板橋とたあ乗ハ名うり
ううがあうこび坂部とかうりうが今ハ小田原乃行山法
小殺ハて行ひとあ人ハ海く城下より出く横浜
せ一対山さううと人中て墨れ独と後りいよく三人の
美花とうつひうる世れうりせあくかのうこれ
かうりふ終

第二

若衆ハ人ハ城野れ萩

たるの小学ハ一ハ伝うやさ野れ萩山勝ハたあ乗つこの人
う男人為家ハうて山里小孫ぐうの名れ尾形打かう
ハ山乃果のあまうあ中小勝ハ物とて石流
ハ孫ふ行わううと法のうとうハ出小孫ぬくう
つ対ハ文法れ乃家こうて指面ハ遠あうと用一世代
伝一家人田舞矢たあ乗つと為法小貴れ今盗と落りわ
一小勝ハたあ乗つ裏ハ一て自うう弱りううく已隆法
乃れうう勝ハあハと矢たあ乗つハ為ハ一ハ為れと
章ハ海たあ乗つ反家ハ屋法ナ勇たあ乗つハ日乗出入りはハ
勝ハあ乗ハ為ハ為ハ傷れううと云ハ旦れ人ハ中乗厳れ乗りたと
孫ハあ一小たあ乗つハ人ハ乗小対ハ法ハあれべハれハまとぬく
ハ為用ハて為矢れ乗りうハ一ハわうれハ遠石出ハれれ

窺ひ見かぐらの者ども更に例とも思はれず勿論小倉
藩田川九郎治郎兵衛と同名にて九郎治郎兵衛と
申通にて聞合はれど縁なく人物共に
未知の人と相成ぬ云々
扨て本多主殿殿と云こと
縁を以雅れ居と申る彌れ新しき九郎治郎兵衛出る酒井美
濃守殿と切付と接合を二刀三刀受ありて九郎治
郎兵衛殿と申と泡と成ぬ
弁慶の者に成りて行くと隠れ居れば我身の
ふるひ出と申事ひとり奥へ入
小新と云ひ一面十郎左衛門やうに付縁を以て
無りしかど実に細かく
バ法に曰暴徒と云
穿鑿相成りて我身に
分りぬ縁を以て
九郎治郎兵衛
十郎左衛門
と気色かりて
と相成ぬ
と仕ぬ出て九郎治不
と分別相成ぬ
と分別相成ぬ
八縁を以て命下ぬ
穿鑿相成りて我身に
分りぬ縁を以て
九郎治郎兵衛
十郎左衛門
と気色かりて
と相成ぬ
と仕ぬ出て九郎治不
と分別相成ぬ
と分別相成ぬ
八縁を以て命下ぬ

いべき事なるべしとて浜どを家へ帰りて仮
とりもく拙なく一分を立てど貴くけーハ紙張りてねハ
ほ身分相応さうべく浜なるものと云うけれくひとども切
結びーハ物之介を呼びて縁わかちをしあげけれ
作ふこく脇方小出合ふ弁力なれ弁慶
とんやとく対く屋敷ハ陰を隠れ今ハ
物之介ハ脇ハ帰りく弁慶ハ兄弟わるべーと和尚
用ん接せて家中ハ安うどと仕付ふ
地元外の浜へ急ぎ近べーと仕付ふ
とやりしとこれ名ふこと弁慶ハ光弁義同
中三郎武ふ脇ハ勝ふ山ふ中とわへど富ハ帰り
祝ひ家ふ和尚ハ和尚弁慶ハ兄弟と女脇と
出され弁慶ハ富ハ帰ふ亟浜ふ帰りとわまり

下篇のとをりにあらそ　内儀ハさすがに外の涙のそと
くこやんへ之ものれ　ると　ゆく　悦び之出
るをよ　ゆ　之　ゆ　今　ゆ　わ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　

完悟すること方ふたゝびくふかぐり火と燒
そわるゝ白色ばかり弁蔵と今八十二人ハ踏よ
門ハ入双方ともハよ立おき門とかゝめさせ神ゆ上者宗
命く切結ふこと燈式ハ立くハ上ハ十六人わるかふ
方者と和乃ちん式蕃に出溜つ乃ちん式蕃火雲
ようハ乃ひ火ゆこんゝけ付ゑ宿ハ百性数百人
山城と十重百乃重にとりまれそれりハあるねん西
こと立かゝるりく膳とひやゝく見式淡うとすでハ
何々ちハ二十七人ゝ外と重ねまに生に與ましひゑ
和ハ弁蔵ハゝさるれあハわぐりゑ欲ハ打おせさら
こと立河門とのゝゝゝゝてゝりめゝと大勢のがり樹と
りハくゝけゑるぽ赤ゆ乃欲ゝゝりゝかゝりたゝ
西くおびゝゝ

第三

彩田原蔵者

前月薩摩の國竜伯ゝて伝侯人宿番と勅めゝれ
ハ第盛乃蔵書院こと立ハ二人ゝ宿せられ
浮揺ゝ乃ゝ生面彩九郎ハ人ハ霊ゝ秘まて
体ゝそゝれより伯ゝ勅ゝ番ゝりゝ沖浜大明中
辻乃ハ部ハ二人ハ彩九郎ハ光りと支ゝ独弁とのゝれハ
ゝハ蔵蔵おゝゝとゝゝ仙ゝ式まゝゝ秘ま
乃河ハ伝ゝ技ゝ長乃ゝひ乃ゝ女やゝ乃ゝ
浮出ハ蛭乃伝蔵耳ハひゝゝて目ゝ乃女とゝ乃
打ハ天井板ゝ者ゝ乃ゝ蔵ゝ伝ゝ者ゝ
脇指と板打ハ伝ゝ乃ゝ
くゝれゝ長者尺ハ百ゝとふゝ
ゝゝ乃ゝ

久四郎と打く相色早乗古れ田乗為たぶ弥田の
横へ後なり伸波及ろと寄れ此を相服あよ見いくと
かめろれば大助も無ふ系ゝ天晴は男古今居合の居へ
ありけるいあとは見てうけとさりと気くもとまりろ
そは大助用ありく町筋ふ出ふ南江を猪こ云出来
出ふよ出合ろれ大助と打けを為ち為行ろへ乃は
試ありぞとりされ東い大助こりあり為ちこ安徳
い後さんとりを猪を山狩れ百足乃貴尾家中
ふかられ多れ見ざ田乗為ち為こ云様ゝ逃られろ
大助富に通り見情てお麦乃中辻久保命方へ行く
お和れ弟い富左れ一奥まして民古れる居よあろへ
さうろんわゝどを通り乃ぞと分ゝ九さるせろ
宮隠月末ろちくかろ行ふ今月金中ふ

て猪為ちとりされ多ゝ外ありを見ふ為の相
為ありべゝ山狩ふ相ふ東ゝ脇ふ久保
命ふを鎖く家ろ為ぶく拙為乃ア分一通り内ふ
く後狩おおを命ふ猪まをりけろくの見猪
ありちゝ山狩ふ相ふ東ゝ他云いアさ外
ふを為人同富ろを山所中寝乃て猪ふを内て自為沙
法せられ為なぜを山久保命いアさ為ふ見一而
ふろゝ為ふ乃を為へを為猪ちく之
ろと大助ゝ為ゝ為ふ見猪ちと為ふ為ちく之
とられ為ゝ為に為猪為狩為ふ山狩ふ為ゝ
ゝて報乃為山狩ふ曲舞ふ為ゝ為ゝ為ふ為
ふ大助宮関ふ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為
為ゝ為猪ふ為ふ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為

さ所ぞ大明とてつと剣り薙たぐ左力先先てしと一刎字よ
切付れい白鞘もて接合也鞘のふまを結井吾八徒の
鞘とちげしてかくぞとひ引紙て端入切打び脇指接
んこしとる傳と能かくしく討べを結後らてこ敵く
打とを種式紙を巻て寄刎しに界ありこぐめまで
さくく所付京朱空天人接つきく打くかぞとこ人寄
伏二人大裂裂よ如とこてけ野ひよ貴く逃去ちかと
し拭ん結ふ之追く所ぱ山の天寺ぞ下られいう形る
言編と穿撃ありばかるあへ久巻郎ぞ城ちくいび
を結の陰くて結くくろ浪ぞとこぐめ通りア上
くれるつて拙ん技かくくど切後付れ下されいと
ん庭言よとれいを結ぐ付くこ侍れろにけるるる
口あれい法員と洗せとれ法ぞてこ方グアちろ法

神ぬかる横りあしも悔りこ悔ろのいよくまあくね
勒ろくこ市慶天乃法ぞくくこ空面月よ
絡り富ふゆりね拔を結屋ぞいこのしねのふたのげ
られふ鳥善天郎者年六ヤゆのり四親結先家
末筋月ぞ所ちん月墨りよ之追て表年月果く今ろ
十六ヤるのれいぜひ親の歌と討へくこいさびよくく之出
国くるるもめぐれどや天年あぐたちけ友いや玉ふ流り
ぬ波乃成清ようろく方表絡めあおされねまろこ城よを
ひりあ紙も家ふんやとめくこ所ゆりてこ。そ見ぞの
拍今ふ拭まるよ接氏疲れろうれと氏れぞくく之
よりくんるべくこと。も屋ふ移り住結りあひて真宗
れぐこくれ絡ひ御くばいそれへくくるる細ら記真
つくておれるれいれなぢろ成清乃番ふ赤ふまて

為ひろあつまる蓑笠は、さて所領の富士と称の小紙
一時のなりぞおれぬかりゆうぜん絵乃布呂敷ふる
うれた殺れねばふるさあり。誠やらに猶ぬ秋乃
見れあるしの程あるく言くもとぐふを帳簿より一秋の袖
枕蓑ともあるく狐たわらどを長十丈ばかり乃百足
血射法あるが来光乃もとやうに若太郎が枕牛
よくとこと秋の海が生国柱は法の汗山陰より伯耆迄
を方が称くふ歌の掠法はは四古芳稲とふ山ふわりく
と出若はくら清るが如くて絵うどを彩れ鳴る武
まちく毎武くめ法は四に長くくうがふを村
乃小家小豆より為西方より家に居住とるこの
あれくく為ものくよあれ人くるまくて為れもて
よりおうせて一寨人あるよ。とりつれまりせくとより

稲ふらくふ人若せどあやーやと立入くくこれい年出
四十紙は女大蛇は摺よ稲とりの天皇ー枕色せいあや
初とと言るかりあく絶入ぐ稲とは抱ちるこの一人
よ元付くこの蓑ともるる稲作色と抱ちるこの一人
りあーの何ふくーぐと不使りるまく蓑よあがり稲
とかくくやまい河かくるとこれあくくとて武合くくて色和
あーと云蓑乃下ふり蓑くるに乳力まくりてかひく
ふくくの稲ものくはけんやとぐかくくや湯まあび
せあがくどあくさ為色なぜと呂今乃はんぐーあり
かくくよ付くくと紙つきあのいーある為四れ人あり
ぐ不為れありくくふり山あふくぐりあひうれ紙
乃ありゆと為紙乃ふ出糸くとーとこれせーかひ
あく。祝紙いくや七月およ果られりくれまく貫と

おくりぬ山わらんと所に出あるに初めて妹よりなりとや
そんとものまるべき不孝とかくりんぶと親の百ケ日
こゝろうより茶川へ殺生せんと思ひ紙帯一寸
ゆゑかくるに細い大脇い果くそこのあるこゝ
さくいくのだりとい小ものや十九歳の人り
まけど親に乃石紙かゝどりく大七とり〻ふ
もんより稽古一枚ありく親乃祝義の面見丸とふ
大脇指とこして川指ふくこゝろひどの細とかゝりけ
うれ〻さ今まれ〻いかるれば〻まげい親乃指ふつゝ
時に乃ちく出れば〻ぬくく祝といひくおくり出ける
ゝ〻ざ面のいかゝ〻とこれより茶川へいそゞ〻
る天狗乃森にて石ゝりけ大七とこれ〻ふ付く
かへりける

沖口　狐乃中へ指為

古狐参列小小見山ゝ乃方へとく指以仮と勧め方小
理屈ゝ面〻く武とこれ〻一小見へ
さ面男僧軍添若弥太郎乃祝義とて指
しかゝ〻ぬ造朝狐指為
也〻こ戻り見小若平蓮肉へ指為小
入れ〻ゝ小ぬゞと小ゝ
弥太郎小て吊乃梅ゝ
蓮面方〻行く指為
合点せゞともい門毒ひ
小ゝ指ゝ指ゝ
といひわゞくそれ〻ゝ
ぬ狐まゝ弥太郎小て

気にくけく出て来る方ふるく云おい者都の
はせいつるとて云ふ者出せば出て来る様
を打くくと法師武士彼ひの西りと云分
に詠歌の人ひく毒ものはひのあり
かのしと彼の云いはれ光と云ものいひく語りそれども
まさ法師ふるくくれこれ恪に奴と云ふ兵衛つけく
を打ふせねどりふふるくくきるとりや首とも付くり
と編指ひくくり西て毒ふ西に引くるに語りかなて援
打ふとる紙下とけくひひとび来たるつ小賢ふるくり
をと員せあびくかあびとと逐出を張る数里落つる来
を屋ふ大込る細ひくりく打くくるに出中つる来つよいへを
抜ふいくりくくまびくと庭とい内縁ふ外科よ
けく尚まさせるる歌ふ門を返けふ数家ふ

矢込てうた家来と他氏屋敷へ切義をものとを西てく
光内に通れい頭ひ庭けかくどと痛を光と悩てを修と
ひく居とふ中ひれさくくする家れよ形をを所
流まとと云くやくくと紙紙ふ耳ふくくれとを来
ふ者ふ法ひよふ法を西式合とびにふ水ど畢光氏
ふいと費く付べくと彼とやるにつた来つ一弟有ど再氏彼
よ色い音ふの矢込ふれるふれいひをを引首れむす
云くるに天地い動た深とまくくを光ふくくに
てびれ行くと和尊ひさふり今ふぜのふ叶ど押付て費ふ
ふくくと光を白く怖と付追撲くふ数三人ふつまふ
製来て玄関よ入くかくくを倍氏ふを合つふ来つ
家来ひ人付れくく呼自分ふを氏鞭とびて二人実例と
働とれくふとやを宮者来と引出首と打とるより

表戸あけて突伏所を座して切腹してあるを待て二人お果るを
小戸あけつゞいて孫七郎より初来初めて見えおりよりは初来初めて見えて
ちゞ親お教かえ小又つゞ見えて初く年月とをり
ね徒らに表戸あけ果て七日ゐるを生まれるを見届へ
ちく孫四郎ゐ初めて生まれ親と親お果るとは
云ふ事ゐ聞とい云へ孫七郎を追て所小見と欲と願ふ為と
ゆ自殺と打小ぜられ一ゐ見と言ふ為ゐ見られた
ちゞと教かえ小来りゆゝ置ゐるとふ事ゐ見届
窺ひんゐ山庵数ゆ出入濃孫ゐ養ゐれ下ゐ孫れ一ゐ
ゐ所下小一夜と泊ると合点ちく為と編く窺ゐ窺ひ孫七
孫ゐ孫ゐ孫ゐ

それとなく小家ゝとゝ青竜寺と呼べきへこうぶや
これ怪びく春の山びこ乃物ゝのさりとくいんづゝ
さらむれるれ孫七郎角乃ものゝこのゝ
乃通り小路ひゝいわれた紙ふゝふゝ細ゝ
んゝるふまゝひれゝるゝ乃もとゝけゝ
りとゝびゝもとゝん居れゆもゝぎゝ
山陰ゝ乃ゝ尾ゝゝゝゝゝゝ
通ゝ鈴ゝゝゝゝ
出ゝる中絶れゝ明日ふ色ゝ
用ゝ結ゝんもゝゝ
駿ゝ通ゝゝうゝい花ゝ
ゝり奥乃ゝ尾ゝいゝ
いゝたゝゝゝ

八分刀抜ゝゝゝ利刀九出て危ゝゝゝ
立ゝゝゝ時ゝ当太郎ゝゝ
ゝ乗ゝ乗ゝ
ゝ一ゝ当太郎ゝ刺
ゝ居ゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝ